

祭りにおける性的儀礼の正当化

—伊豆稲取どんつく祭りと素盞鳴神社の夏祭りを通して—

深 沢 佳 那 子 *

FUKAZAWA Kanako

Justification of Sexual Ritual in Festivals

Through the Dontsuku Festival and the Summer Festival of
Susano-o Shrine in Inatori

This paper discusses that what can justify sexual rituals in festivals, focusing on two festivals held in Inatori: the summer festival of Susano-o shrine and the Dontsuku Festival that ended in 2018.

Traditional sexual ritual in festival is thought as pray for fertility or warding off evil. The summer festival has a ritual that two *tengus* called “omen-san” chase women and children with a phallus-shaped wooden stick. This ritual started to pray for eradicating dysentery. People believe the ritual has been held since a long time ago. But actually, the ritual was started in 1927 as a “joke”. Thus, the joke can justify religion rituals. The phallus at this festival is not a religious object, but a symbol of the “fun of genitals.”

On the other hand, the Dontsuku Festival has been held since 1966 as an event for tourists and is characterized by carrying a huge phallic-shaped portable shrine. It has been considered that sexual expression in new festivals for tourists like the Dontsuku Festival has no cultural value and, therefore, it has hardly been studied. However, the Dontsuku Festival and the summer festival have “fun of genitals” in common. It is necessary to carry out research on sexual ritual without judging if it is “traditional” or not.

キーワード：生殖器崇拜 性神 観光資源 娯楽 創られた伝統

* 学習院大学大学院人文科学研究科

はじめに

どんつく祭りは毎年6月上旬に静岡県賀茂郡東伊豆町稲取の稲取温泉で開催されていた祭りである。この祭りは観光客向けのイベント的な祭りとして昭和41（1966）年から始まったもので、巨大な木彫りの男根をご神体の「どんつく神輿」として掲げて温泉街を練り歩くという特徴を持つ。その「性器崇拜」という性格上全国的に有名とはいいがたいが、いわゆる「奇祭」として一部のマニアには名が知られている祭りだ。バブル期を中心に全盛期では7,000人もの集客を誇り[『毎日新聞』2018年6月2日]、稲取温泉の観光の目玉としてこの地を支えた。

しかし第53回目を迎えた2018年、突然このどんつく祭りは幕を閉じることとなった。6月の祭りの開催に先だって、2月にウェブニュースとして「どんつく祭、今年で終了」と報じられた[『静岡新聞』2018年2月2日]。『静岡新聞』によれば、祭り期間中の観光客の宿泊数がピーク時の3分の1以下の2,000人前後まで落ち込んでいたことなどから、「予算を他の事業に振り分けるべき」などの意見が挙がったことが主な要因であるという。「今後は神事だけを執り行うなど、規模を縮小する方向で調整している」とし、観光客向けの祭りは2018年で終了することが正式に発表された。

このような経済効果を狙ったイベント的な祭りが収益の低下を理由になくなるということ自体は珍しいことではない。ただし、どんつく祭りの場合は『毎日新聞』が「どんつく祭：今年が最後 ご神体PRしづらく」と題して報道し、その男根というご神体の形状もまた祭りが終了した要因の一つであるとされた[『毎日新聞』2018年6月2日]。このご神体の形状というものは当然ほかの性器崇拜の祭りにも共通するものであり、形状の問題視は男根をご神体とする全ての信仰・祭礼にも関わってくる問題である。特にどんつく祭りのようなご神体を有する類似の祭りにとっては無視できない問題であろう。

どんつく祭りについての報告をする前に、まずどんつく祭りのような「新興の観光型性器崇拜祭り」の概要について触れておく。本稿では「①伝統的の神事ではなく、②昭和期以降に主に観光客誘致や町おこしの為に始まった、もしくは拡大した祭りで、③巨大な男根型をご神体として有する祭り」を「新興の観光型性器崇拜祭り」と定義する。性器崇拜の儀礼そのものは古来より豊穡儀礼を中心に行われてきた普遍的なものであるが、昭和・高度経済成長期以降に観光客も楽しむことが出来るイベント的性格を持った性器崇拜の祭りが現れるようになった。これらの祭りはその多くがどんつく祭りのように巨大な男根型のご神体や神輿、もしくは造形物を祭りの目玉として掲げることを特徴としている。その中には観光客誘致は二の次として神事としての性格を重視する祭りもあるが⁽¹⁾、男根型という象徴的なシンボルによって市民・観客の関心を集める目的があることは間違いなく、観光型という言葉を用いたい。

例えばかなまら祭り（神奈川県川崎市）、ほだれ祭り（新潟県長岡市）、しねり弁天たつき地藏祭り（新潟県魚沼市）、雪中花水祝（新潟県魚沼市）、大沢温泉金精祭り（岩手県花巻市）、美ヶ原温泉道祖神祭り（長野県松本市）、姫神祭り（徳島県海部郡）、こんせいまぐわい祭り（岩手県盛岡市）などが「新興の観光型性器崇拜祭り」と定義できる。これらの祭りは伝統的の神事ではなく、近年になってから巨大な男根を製作しご神体として掲げるようになったものである。これらは主に神社や小さな祠、またはその土地の伝説や習俗などに残る既存の性器崇拜を利用し、それを発

展させることで近年生み出された祭りだ。例えばかなまら祭りは江戸時代に川崎宿の遊女から信仰を集めた若宮八幡宮の性器崇拜を発展させて1977年に始まったものであり〔田中1996:16〕、ほだれ祭りも小さな道祖神の祠とそこにまつわる伝説に着想を得て1980年に男根神輿を掘り出し開始された〔じもテレHP〕。同じく雪中花水祝は江戸時代の随筆家・鈴木牧之の著書『北越雪譜』に残る水掛儀礼を115年ぶりに復活させ、ご神体として黒と赤の男根型をそれぞれ1988年と1990年に新たに作製したものである。更にしねり弁天たつき地蔵祭りも男女が祭りの日につねり合って交流したという小さな民俗行事に大きな解釈を加え、1980年にご神体を作成して始まったものだ〔小出町商工会青年部1998:6〕。

そしてどんつく祭りにもまた、その元となった土着の祭りが存在する。それは稲取で現在も行われている古来の「夏祭り」のひとつである素盞鳴神社の夏祭りだ。この夏祭りの大きな特徴の一つに、「おめんさん」と呼ばれる天狗の存在がある。この「おめんさん」は例年若者によって演じられ、子供や女性を追いかけて厄除けを願うものであり、その手には男根型に彫った60cmほどの木の棒を持っている。どんつく祭りはこの天狗が持っている男根状の棒に着想を得て、観光客向けの祭りイベントとして開始されたものだという。どんつく祭りには前述した男根型の神輿とともにこの夏祭りの「おめんさん」に瓜二つな別の「おめんさん」も登場し、祭りを盛り上げる。つまりどんつく祭りは現行の伝統的な夏祭りから性器崇拜に関わる要素のみを抜き出してそれを発展させ、新しく作り上げた別の祭りなのである。既存の信仰を利用するという点は他の新興の観光型性器崇拜祭りと同じであるものの、継続して行われている別の祭りからの性器崇拜のみの流用という点で大きく異なる。すなわち、どんつく祭りができた時点で、稲取における「性器崇拜」は夏祭りとどんつく祭りの二つの祭りへと二分化したのである。ほかの観光型性器崇拜の祭りが古い信仰を掘り起こし新たなる祭りとして始まったものであるのとは対照的に、どんつく祭りは町民にとって馴染みの夏祭りのいわば「真似」から始まった。類似の祭りと比較するとどんつく祭りの成り立ちは特殊であると言えるだろう。

「新興の観光型性器崇拜祭り」はその見た目の面白さから昭和期に熱心な好事家によってしばしばレポートされたが⁽²⁾、伝統的な神事と異なり歴史的・文化的価値も少ないと考えられ、民俗学的アプローチからの検証はほとんど行われてこなかったのが現状だ⁽³⁾。その一方で、古来の豊穰儀礼などに見られる性器崇拜・性的儀礼に関しては多くの研究が積み重ねられてきた。特に男女の性交を模した「感染所作」「類感呪術」が豊穰の予祝として演じられるとされる田遊びや田楽、神楽などについては、折口信夫が指摘して以降多くの報告がある〔折口1995〕。その例は枚挙に暇がないが、東京都板橋区下赤塚の諏訪神社の翁と媼が抱き合う田祭りや、奈良県明日香村の飛鳥坐神社で天狗とおかめが性交を模すおんだ祭りなどは中でも有名である。また秋祭りの獅子舞に随伴するひょっとこなどの道化が男根を持って女性を小突いたりする習俗も同じく一般に豊穰儀礼であり更には女性の子宝を願うものであるともされ、後述する稲取の夏祭りの信仰形態は一見これに限りなく近い。これら祭りの儀礼における性的結合はしばしば平安末期に記された『雲州消息』に稲荷祭で翁が若い女と性交の物まねを演じたとする記述などと結びつけられ〔山折1988; 松前1988〕、「極めて真剣な、まじめな行事として行われてきて」〔樋口1974:80〕おり、「近年になって始まった物好きの悪戯ではなかった」〔戸井田1972:46〕と考えられてきた。これらは宮本常一が報告したような昭和期の日本の田舎に残る田植えでの猥歌などとともに、古代の「おらかな性の神事」を現代に伝承するものと見なされてきた〔宮本1984〕。

このように、どんつく祭りのような研究対象として除外されてきた新興の観光型性器崇拜祭り

と素戔鳴神社の夏祭りのように古来の「おおらかな性」の祭りの枠組みのひとつとして理解する伝統的な祭りは、民俗学的研究において真逆の立場に置かれてきた。しかし本稿ではどんつく祭りと素戔鳴神社の夏祭りを連関する祭りとして捉え、このふたつの祭りが既存の性的儀礼の研究においてどのような意味をもたらすのかについて考察し、祭りにおける性的儀礼の立ち位置を再定義したい。その為にまずどんつく祭りのその終了までの経緯を確認することで「ご神体の形状の問題視」がどのように発生したのかを明らかにし、これまで明確にされてこなかった新興の観光型性器崇拜祭りのアウトラインをはっきりさせる。これによって「性的儀礼が問題視されるどんつく祭り」と「性的儀礼が問題視されない夏祭り」における性的儀礼の扱いの差の可視化を試み、ふたつの祭りを例として従来の民俗学研究における性的儀礼の解釈の妥当性を検証する。

1. どんつく祭り

(1) どんつく祭りの概要—観光客誘致の為に性器崇拜祭り—

どんつく祭りはその元となった夏祭りとの関係性については基本的に公にしておらず、「2000年前よりこの地に伝わる夫婦和合、子孫繁栄、無病息災を神に祈願する祭り」であるという触れ込みで開催していた⁽⁴⁾。勿論これは観光客用の誘い文句であり、実際は「石棒が出土した弥生時代の遺跡が近辺にあるから」というこじつけの理由だ。

どんつく祭りは前述の通り、稲取の夏祭りに登場する「おめんさん」と呼ばれる天狗に見られる性器崇拜という要素を「観光客向けの祭りへと発展させたい」という観光協会の案が発端となって始まった祭りである。後ほど詳述するが、この「おめんさん」は慣例上20歳となる2人の若者が赤と青の天狗の面を被り、手に男根を模した木の棒を持ち、厄払いの為に町民を追い回しその棒で突くというものだ。どんつく祭りにおいてもこのおめんさんは観光客や女性・子供を追い回す役で登場するが、後述する夏祭りのおめんさんとは異なり脇役に徹しており、おとなしい。

『いなとり荘のおいたち』によれば、1966年に観光協会が愛知県犬山市の田県神社の豊年祭を見学に行き、そこで見た男根型の神輿を真似て作ったのがどんつく神輿であるという。更にまたどんつくという名も「どんと突く」と博多の「どんたく」から作ったものであり、観光客誘致の為に「楽しさ・面白さ」が最優先されていたことが想像できる〔宮原 1990: 105-107〕。

また神輿の作製に伴い、翌年の1967年には稲取東町地区内の八幡神社から勧請した「どんつく神社」も温泉街近くの丘の中腹に建てられた。性器崇拜とは無関係な八幡神社からの勧請であることから、あくまで観光資源として一から作り出されていったものだということが判る。

どんつく祭りは最初の数年は古くから行われてきた夏祭りと同日に行っていたというが、どんつく祭りの「神輿パレード」と夏祭りの「ねり」と呼ばれる太鼓がいさかいを起こしたことで別日に行われることとなった〔宮原 1990: 163〕。この時点で既に地の祭りを行う者の一部ではどんつく祭りを快く思っていなかったことが推測される。昔より稲取の夏祭りはその激しさで有名で、喧嘩で順延することも珍しくなかったという。そこに新しく伝統のないどんつく祭りが参入することで揉め事に発展することは想像に難くない。夏祭りを下地として始まったどんつく祭りだが、両祭りの関係は最初から良好なものとは言いがたかったようだ。

続いて、2018年のどんつく祭りの報告を行う。なお、どんつく祭りに関しては2016年、2017年も見学を行っているため、2018年との比較も適宜行うこととする。

(2) 2018年どんつく祭り報告—53年目の幕引き—

2018年の第53回どんつく祭は6月3日(日曜日)に行われた。例年は6月第1土曜・日曜の2日間にかけて行われていたが、最後の年は縮小化の方向性により1日だけの開催となった。

まずはどんつく神輿を祭り会場がある海沿いの温泉街まで運ぶ作業が行われる。午後4時にどんつく神社で祝詞が上げられたあと、軽トラックにご神体が乗せられ、丘を下る。以前は担ぎ手が実際に担いで下っていたそうだが、簡略化により現在はこのような形態となった。

温泉街には下ろされたどんつく神輿に加え、小さな男根型の神輿が二基安置される。これは子神輿と呼ばれ、以前は女性が担ぐものであった。元々温泉街の観光客誘致として始まったこの祭りでは、この小さな男根神輿を温泉芸者たちが担ぐのも見物の一つであった。つまり男性観光客向けの「お色気要員」である。それが時代の流れで芸者がいなくなるとそのあとにはコンパニオンが担ぎ、更にコンパニオンもいなくなると参加希望の地元女性が担ぐようになった。しかしとうとう2018年は祭り終了まで出番はなく、役目を失った子神輿は片隅に安置されたままであった。

午後7時になるとどんつく神輿の「パレード」が始まる。地元の担ぎ手は少子化・高齢化により年々減少しており、そのため現在は下田市の若い担ぎ手の方々に協力をお願いしているという。

どんつく祭りの神輿は狭い温泉街を激しく左右に振りながら駆けるようにして往復するのが特徴である。観客にぶつかりそうになる危険な担ぎ方だが、これは夏祭りでの伝統の担ぎ方を取り入れているものだ。また元々この祭りは観客参加型を特徴として掲げており、観光客も主に子神輿の一つを担ぐことができた。しかし2016年の第51回どんつく祭の後に警察から神輿の担ぎ方が危険であると指摘され、観光客を参加させる際には念書を書かせなければならないという指導が入ったという。それは飛び入りの観光客にとって現実的ではなく、結果的に観客参加型の形態は失われてしまい、祭りの縮小化に拍車をかける結果となった。

約30分間の神輿の「パレード」が終わると、餅撒きおよび花火の打ち上げが行われ、約2時間程度でどんつく祭は幕を閉じた。

(3) どんつく祭り終了の経緯—士気の低下による諸問題の発生—

今回、観光協会のTさんにお話を伺うことができた。まず今回どんつく祭りが終了となった契機についてであるが、報道の通り、祭りの経費を港の整備などに使いたいという意見が上がったことは確かであり、宿泊数の低下などの財政面での問題点と共に祭りが終了する理由となった。

しかし祭りの終了の要因は財政面の問題ひとつではなく、まずは少子化・高齢化に伴う人手不足により年々祭りの規模が縮小化したことで、次第に活気も失われていった点が挙げられるという。以前は招福面の手ぬぐいを鼻まで被って踊る「しょうふく面踊り」が祭りのメインの出し物として催されていたというが、これも2013年頃になくなってしまったようだ。

更に2016年に神輿の担ぎ方や観客の参加方法に関して警察が介入したことも、祭りが終了へと向かう大きな要因のひとつとなった。警察からは観光客の参加の不可以外にも、担ぎ手が飲酒しているのは危険であるとして神輿の練り歩きの在り方そのものを問題視する指導がされたという。今までのように担ぐことができなくなったことで、祭り全体の覇気がなくなった。

そして前述したように、主にそのご神体の形状を問題として祭りを中止する旨が新聞に掲載されることとなる。6月5日の『伊豆経済新聞』によれば「御神体の特徴から来るクレームや、宣伝広告などが行いづらい課題もあり、観光協会をはじめとする祭り関係者は今年で休止すること

を決定した」として、男根神輿そのものや性器崇拜という形態に問題提起がなされている〔『伊豆経済新聞』2018年6月5日〕。同じく、前掲した6月2日の『毎日新聞』でも「どんつく祭：今年が最後 ご神体 PR しづらく あす、東伊豆・稲取温泉」と題していることから、報道では主にご神体の男根という形状を特に問題視していることが判る。これらの報道を受けてか、雑誌の中で「ご神体の形がダメだから終わっちゃうんだって」と述べる神輿の担ぎ手もいた。しかし、Tさんによれば実際のところ信仰形態に関する苦情などは極まれにメールなどであるものの、当然終了に追い込まれるほどの大量のクレームがあったわけではなく、地元からのそういった声に関してはほとんど聞かれないという。従って告知のし難さなどはむしろ観光協会側の自粛に近いものであると考えられる。事実、この祭りは地元の中高生の参加者が非常に多く、若者たちの同窓会的な場としても活用されている。また子連れ客がご神体と共に写真を撮る姿や、おめんに子供を差し出して男根で突いて貰おうとする母親の姿も見られた。それにも関わらずご神体に関する苦情を祭り終了の理由のひとつとして挙げたのは、やはり開催する側の自粛という側面が一番大きいだろう。

またどんつく祭り終了後の翌年である2019年6月1日には「どんつく奉賛花火大会」として中止となったどんつく祭りの代わりに花火大会のみが開催された。祭り自体はなくなったものの、会場にはご神体が展示されたという。これは男根の形状自体が問題ではなかったということの証左に他ならない。本当に形状が問題視されていたならば、ご神体は隠しておくべきだからだ。

祭りが終了となる理由を複数述べたが、最も根本的な問題は現場の士気が下がっているという点である。Tさんによれば10年ほど前から士気の減退は感じていたといい、警察からの指導を抗議なく受け入れてしまうことも、外部からの苦情を祭り終了の要因として掲げてしまうことも、それらに抗うほどの熱意が既に住民たちになくなっていくということが根本にはある。

これにはどんつく祭りがあくまで観光用の祭りとして成立したものだという意識が根強く市民の中にあることが要因であると考えられる。特に主体となって祭りを運営している温泉街の外の町民にとってこの祭りはあくまで観光用であり、聞き取りを行った印象はあまり好意的ではなく、「あれは観光用であり、本当の祭りではない」という言葉を多く聞くこととなった。興味深いことに、これは20代および30代の男性からも聞かれた意見である。つまり彼らにとっては生まれたときからあるはずの祭りであるにも関わらず、どんつく祭りは「本当の祭りではない」と考えられているのだ。中高生の交流の場となる楽しいイベントである一方で、町民の精神的支柱となるような「祭り」には決して成り得なかったのである。

先述したように、このどんつく祭りは観光協会によって夏祭りから性器崇拜の要素のみを抜き出して作られた祭りだ。温泉街の外の町民にとってこれが「まがい物」のような扱いは、彼らにとっては次に紹介する素盞鳴神社の夏祭りこそが本物の祭りだという意識が強いからである。

2. 素盞鳴神社の夏祭り

(1) 素盞鳴神社の夏祭りの概要・報告

前述した天狗の「おめんさん」が登場する素盞鳴神社の夏祭りは7月の15、16日に行われる。これは13日から17日の5日間にわたって稲取の各町にある神社で行われる夏祭りのひとつで、西町の三嶋神社から始まり（13、14日）、東町・八幡神社（14、15日）、田町・素盞鳴神社（15、

16日)、水下・愛宕神社(17日)、入谷・山神社(17日)と続く。このうち、おめんさんは15日に素盞鳴神社から神輿が出て御仮屋へと向かう「お下り」から翌日の入谷への神輿の受け渡し時まで登場する⁽⁵⁾。

まず2018年7月15、16日に行われた田町・素盞鳴神社の夏祭りの報告を行う。筆者は7月14～17日に稲取に滞在し、祭りの見学及び聞き取り調査を行った。

2018年のお下りは午後3時より行われた。すでに港沿いには西町の三島神社、東町の八幡神社、そして田町の素盞鳴神社の御仮屋が作られており、神輿を迎える準備が行われていた。素盞鳴神社はそこより700メートルほど離れた高台の、更に数十段の階段を上った先にある。夏祭りはどんつく祭りとは異なり観光用の祭りではないため、神社周辺に観光客は皆無であった。

神輿の前には赤と青のおめんさんが若者ふたりにそれぞれ首元を捕まれて、俯きがちに無言で佇んでいる。これは天狗のお面の目の開きが非常に小さく視界が遮られているために、付き人の若者がその行動をコントロールしているのだという。おめんさんは2日間各地区で引き継がれ人を変えながら町内を練り歩くが、常にこのお付きの者によって行く方向を指示されることとなる。そしてそのおめんさんの手には男根状に彫られた60cmほどの松の木の棒、すなわちどんつく祭りの発端となった棒が持たれている。この棒には特に名称はない為、本稿では便宜上陽棒と呼ぶ。前述したようにどんつく祭りにもおめんさんは登場するが、衣装・お面・陽棒は夏祭りとは別のものを使っている。また同じ棒を使い続けるどんつく祭りと異なり、夏祭りでは原則毎年棒を制作するしきたりがある。両祭りはあくまで別の祭りとして線引きされていることが伺える。

おめんさんを先頭にして御輿は慎重に長い階段を降り、階段下の一の鳥居へと下る。そして鳥居に到着した瞬間、おめんさんは御輿から離れて港の方へと駆け出す。御輿はそのまま「田町っこ！」という掛け声を掛けながら町内を巡り、港の御仮屋所へと進んでいく。

神輿から離れたおめんさんは、「ウオオオオオ」といううめき声を上げながら港で主に子供たちを追いかけ、陽棒で軽く突いて厄払いをする。子供はその形相に泣き叫び親の後ろに隠れるが、親たちは子供をおめんさんの面前に無理矢理連れ出す。子供が言うことを聞かないと親が「おめんさんが来るぞ」と言い、しつけに使われていることが伺えた。子供が逃げ、大人たちがそれを見て笑うといった光景が繰り返される。

その一方で年配の人達が自ら腰を突いてもらったり、車椅子に乗った女子が脚を突いてもらったりする姿も見られた。体の悪い部位を治してくれるという信仰も根付いているようだ。

1時間程度でおめんさんは港の周りからいなくなり、また町内のどこかへと駆けていく。その間に神輿が港へ到着し、御仮屋へと納められた。その後いつの間にかおめんさんのお面と陽棒も神輿の横へ納められ、初日のおめんさんの仕事は終わりとなる。

翌日は町内を巡った神輿が神社へと戻る「お山入り」である。朝8時に安置されていた御仮屋から出発し、再び神輿とおめんさんが町内を回る。素盞鳴神社は田町の神社であるが、稲取の全町が参加して神輿とおめんさんを引き継ぐのが特徴だ。田町を出発した神輿はそのまま西町、東町へ受け継がれていき、おめんさんも各町の若者に交代することとなる。そのあとは港から高台へと上っていく水下、入谷と各町へ神輿が回ったのち、駅前待ち構える田町の人達へと再び神輿が渡されて素盞鳴神社へと戻っていく「お山入り」が行われる⁽⁶⁾。おめんさんはその最後の入谷地区で登場したのちは神輿には随伴せず、そのまま姿を消す。以前は最終地点である入谷の山神社に所持していた陽棒を奉納しており、毎年奉納される陽棒が山神社の裏に山積みとなっていたという。しかし2016年頃から原料である松の木が減少していることを主な原因として数年間

同じ陽棒を使い回すようになった為、現在は山神社への陽棒の奉納は行っておらず⁽⁷⁾、山積みとなっていたという陽棒も現在は廃棄され社内には一本もない⁽⁸⁾。

また以前は神輿を次の地区へと受け渡すときや最後に神社に戻るときなどは押し合いや神輿の奪い合い、妨害行為などが激しく行われていたという。例えば最後に神輿を素盞鳴神社に戻す際は道の入り口で別の地区の者たちが待ち構え、神輿が戻るのを塞いで妨害する。これが以前は暗くなるまで何時間も続くことがあったというが、現在はあくまで儀礼的なものに留まり数分しか妨害行為を行わず、祭りの規模の縮小化が伺えた。

午後3時頃神輿が神社に戻され、2日間に及ぶ素盞鳴神社の夏祭りは終了する。

(2) おめんさん—女性を襲う恐ろしいモノ—

おめんさんは従来、その年に20歳となる男性が務めるものであった。しかし現在は若者の減少により慣例を引き継ぐことが難しいため、年齢制限は設けていない。また、先述のように以前は松の木で毎年新しい陽棒を制作していた。これも以前はおめんさんを務める若者本人が削り出していたもので、夜中に目隠しをして最初につかかった木を切るといった儀礼や「お面を冠る若い衆が競争で棒を制作し、一番早く神前に供えた者の棒が使われ」〔東伊豆町文化協会 2008: 128〕るといった決まり事があったという。しかしそれらのしきたりも現在は失われている。

筆者が見学した際のおめんさんの動向は上記の通りであり、奇声を上げながら町内を走って子供を追いかける程度に留まっていた。しかし以前のおめんさんは各家の中にも玄関から入ってきて泥足でわざと足跡をつけて走り回ってから縁側から出ていくというしきたりがあり、その足跡は縁起物とされしばらくは拭き取らずに残しておいたという。これは旅館においても例外ではなく、稲取温泉の旅館・いなとり荘ではおめんさんが大風呂に飛び込んで濡れのまま館内で暴れ、畳にまで土足の跡がついて掃除に難儀したということが記録されている〔宮原 1990: 103〕。

以前は事前に酒を大量に飲み酩酊状態になってからおめんさんを務めるという習わしがあったために、その行動は悪行を極めた。追いかけられた女性が二階から飛び降りて怪我をした〔東伊豆町文化協会 2008: 128〕、逃げた観光客が港から落下した、などの不祥事もあり、警察沙汰になることも少なくなかったという。その為「地元の人達は伝統行事と知っているが、事情を知らない移住者や、観光客などとのトラブルが毎回のように発生し、祭典執行者の悩みの種」〔東伊豆町文化協会 2008: 128〕となったらしい。

そして特筆すべきは女性に対する乱暴行為である。以前のおめんさんにとっては女性を追いかけて陽棒で突くのが“特権”であった。「小学校でも、女の若い先生のクラスでは、祭りになると授業にならないこともあり、授業中悪童が「お面さんが来た」と叫ぶと、先生は授業を放り出して逃げ出し、時には便所へ隠れて出てこない先生もあった」〔東伊豆町文化協会 2008: 128〕といい、女性にとって恐怖の対象であったことが伺える。町内の40代前半女性によると以前のおめんさんは「今なら準強姦罪」とも言えるもので、押し倒されて体をまさぐられるのは当然であったという。「東町のおめんが特に怖かったからみんな西町に逃げていた」そうで、「家の中にも入ってきて襲われるから、高校生の頃は怖くて学校から家に帰れなかった」という。80歳男性は自身がおめんさんを務めた際に「陽棒は放り出して、家の中に隠れていた女性の下半身を触った」と武勇伝のように語った。60代女性は「あのうめき声を聞くと今でも身震いするほど怖い」と言い、『いなとり荘の生い立ち』にも「捕まった女性は気の毒で、あの棒でぐいぐいこすられるので、内股などの皮膚が真っ赤に腫れ上がったものだそうだ」と記されている〔宮原 1990:

103]。また一方で筆者の聞き取り調査にすら嫌悪感を示す60代女性もおり、「おめんさんの性的な話はタブーでありよそ者に言うことではない」と激昂して語ることを拒否した。

80歳男性によれば50年前(1969年頃)にホテルの女風呂に入って観光客を襲ったことでおめんさんの行動が問題視されるようになりそこから大人しくなったと言うが、上記の通りその蛮行は40代前半女性が高校生の頃、すなわち平成の初期頃まで続いていた。ただし50代女性への聞き取り調査では「性的な行為は受けなかった」といい、おめんさんを務める者の個人差や年代差によってその蛮行の程度は多少変化したと思われる。いずれにしてもこの性的蛮行文化は平成の中頃には完全に消失したようだ。前述のように現在のおめんさんは子供を脅かして泣かす程度のことしかせず、女性には目もくれない。家の中に入ってくる慣例とともに女性を襲う慣例も完全に失われたとっていいだろう。

しかし現在でも「おめんさんは女性を襲う」というのは町民の常識となっており、女である筆者も男性の町民から「ひとりで来たのか、おめんに気をつけろよ」と茶化するような注意を何度も受けることとなった。またおめんさんについて調査していると話すと「女なのによくやるな」という反応をされ、面白がられた。彼らにとっていまだにおめんさんは女性を襲うものという記憶が根強く残っていることが伺える。

(3) おめんさんの成り立ち—変化し続けるその性質—

おめんさんは昔この地で赤痢が発生した際に厄除け儀礼として始まったとされているが、その時期や詳細は不明である。実際稲取は用水に恵まれていなかったことから古来より疫病が多く、その撲滅の為に明治24(1891)年から日本で2番目と言われる早さで水道の設置に着手した歴史を持つ[山口1999:46]。町民にとって赤痢の撲滅は最も切実な願いであり、このおめんさん儀礼が疫病除け神事として出来上がったものであることはほぼ間違いない事実であろう。

更に陽棒の由来・意味についても各文献によって異なり、はっきりとしない。

『伊豆風土記』『静岡の年輪(下)』では江戸時代に赤痢が流行した際に山の神に厄払いを祈願し、入谷の山神社に奉納してある木彫りの男根で患者のいる家を一軒一軒回って赤痢を追い出そうとしたものだとしている[山田1982:70-71; 毎日新聞社1972:38-39]。

『稲取風土記』では同じく「山の神の原始天狗の男根で母胎のお腹を撫でることが疫病平癒につながるという素朴な信仰」であるとした上で、安政5年に伊豆でコレラの流行があった際に埼玉県の三峯神社の僧が祈禱を行い、その際に三峯神社の節分会で「ごもつとも様」と呼ばれる男根状の棒を突き上げる性器崇拜の神事が伝播したとする説を説く[金指2010:92]。

いずれの説も、山神社に奉納される男根に原始的な山の神信仰があるとし、その力で赤痢を排除しようとしたものだとしている。つまり天狗の面よりも先に男根による厄払いの力への期待があり、陽棒ありきで始まった祭りであるとするものだ。先述のように、以前は入谷の山神社には祭りの際に使用された陽棒が山積みとなっていた。山の神に男根を供えるという習俗は広く見られる民俗行事であり、これら「陽棒=山の神信仰」説は一見不自然なものではないように感じた。しかし1975年の雑誌『旅』に収録された稲岡秀男氏による記述には以下のようにある⁹⁾。

今を去る六十数年前、まだ私が子供の頃、稲取にセキリが発生して村全体が火が消えたように寂しくなったことがあった。その時村人たちが悪疫退散のため素盞鳴神社に祈願、臨時にお面を出して天狗が家々の悪疫を払ったところ、すっかり伝染病も収まり、また活気に満ちた明

るい村に戻ったことを覚えている。以来、天狗の厄払いの信仰も一層強くなり、いつしか天狗に陽物でお腹をたたいて貰うと丈夫になるといわれるようになった。子供たちは母親に連れられて天狗にお腹をたたいて貰う。その姿はほほえましいものだ。[稲岡 1975: 155-156]

これは前掲の山の神信仰を語る昔話とは異なり実際の儀礼を報告したものであり、信憑性が高い。ここでの「六十数年前」は明治 43（1910）年頃を指していると思われるが、「臨時にお面を出した」という記述からそれ以前よりお面による定期的な儀礼が行われていたことが推測される。そして特に着目すべきは「いつしか天狗に陽物でお腹をたたいて貰うと丈夫になるといわれるようになった」という記述だ。これは当初の儀礼には陽棒が含まれておらず、あとからできたものであることを語っており、「陽棒＝山の神信仰」によっておめんさん儀礼ができあがったとする前掲の説を否定するものであると言える。

更に稲取の郷土史家である岡田善十郎さんから貴重な聞き取りの記録を伺った。岡田さんによれば、「昭和 2（1927）年におめんさんを務めた人たち（つまり昭和 2 年に 20 歳を迎えた若者）が悪ふざけで男根状に削ったのが始まりである」ということだった。それ以前はおめんさんが所持している棒は男根状ではなく、ただの棒を和紙に包み、それを麻の紐で縛って担いでいたという。その麻紐をくくり付けやすくして持ちやすくする目的とともに、「悪ふざけ」も加わって彫り込みを入れたのが昭和 2 年のことであった。つまり昭和 2 年以前はおめんさんの持つ棒に男根としての信仰はなく、従っておめんさんという儀礼の中には山の神への信仰自体がそもそもなかったのである。1910 年頃時点の祭祀がお面のみで行われ、いつしか陽棒が出現したとする稲岡の記述の通り、以前はこの儀礼に陽棒はなく、「天狗の面による厄除け」のみが行われていたと考えられる。また、山神社に祭礼の度に陽棒が奉納されたのは山の神信仰によるものではなく、そこが祭礼で神輿を運ぶ最終地点であること以上の理由はなかったと考えられる。つまり使い終わった陽棒を祭りの終了と共に山神社に納めていただけなのだ。

この「悪ふざけ」の経緯は町民に全く知られておらず、彼らにとって陽棒はあくまで「厄除けのための男根」として定着しており、古来の儀礼だと信じられている。更に前述の『伊豆風土記』『稲取風土記』などが山の神説やごもとも様伝播説を掲げていることも加わって、陽棒の正体は完全に忘れ去られている、もしくは完全に隠されてしまっているようだ。

また、以前のおめんさん象徴する「女性への蛮行」が以前はなかったものであることを『稲取若い衆団体のあゆみ』は語っている。

今の「お面」の行動に些か疑問を抱くものであります。（中略）経験を持つものには目に余るものが多い見受けられるのであります。本来・厄除けの神として存在すべき神事であるはずなのに、昨今の行為を見るに、色に狂った病人に見えてなりません。[山崎 1994: 19]

ここでは、本来おめんさんは家にいる者の背中に持っている陽棒を加減しながらぶつけるだけの儀礼だったとし、このように平成 5 年当時のおめんさんの行動について嘆いている。やはりおめんさんの女性に対する蛮行は陽棒が作られてしばらく経ってから生まれたものであろう。つまり昭和 2 年に完成した陽棒というシンボルに引っ張られるかたちで性的な蛮行が行われるようになったのだと考えられる。そしてそれがいつしかおめんさんの本質に近いものとなり、「女を襲う恐ろしいモノ」として町民に浸透していったのだ。これは当然、時代と共に疫病の流行がなく

なり赤痢の治癒という願いが切実でなくなったことも背景にあるだろう。疫病の廃絶によって形骸化したおめんさんという儀礼は、次第に信仰のなかったはずの性器崇拜とそれによる女性への蛮行をそのアイデンティティとしていったのである。

更に稲取のホテル「浜の湯」は開店祝いとして寄贈された陽棒を「御神体」として展示し、「女性が手でなざると丈夫な子宝に恵まれ、子孫繁栄と言われています」と説明を付している。当然子宝信仰は以前のおめんさん儀礼には含まれておらず、そもそも陽棒はご神体でもないはずだが、一部では新たにこのような「御利益」が唱えられ始めているようだ。これは言うまでもなく男根を用いた類似の子宝信仰の儀礼に影響を受けているものであろう。信仰から儀礼が生まれたのではなく、既存の儀礼の中に新たな信仰が組み込まれていったのである。性的蛮行こそなくなったものの、陽棒の持つ絶対的な力への信仰は類似の儀礼の信仰までも取り入れながら今なお拡張し続けていると言っていっただろう。

3. どんつく祭りはなぜ終わったのか—性的儀礼が問題視される祭り／問題視されない祭りの差異—

どんつく祭りの原形となった「おめんさん」の陽棒を持つ現在の形が、昭和2年に完成したものである可能性が高いことを確認した。そしてそれは現代に至る間に女性を襲う非道な恐ろしいモノへ、そして厄除け・病除け、更には子宝の神的存在へ、と徐々に性質を変えていった。

おめんさんが過激な乱暴行為の自粛を余儀なくされたのは、共同体のルールの中で行われていた行事が外に開かれていったことに要因がある。稲取温泉の開湯は周辺の伊豆の温泉地と比較して新しく、昭和30(1955)年のことだ。その後続けて昭和36(1961)年に伊豆急行が開通し、昭和42(1967)年に東海岸有料道路も開通した[金指2010:305]。閉鎖的であった稲取が観光地として機能し始めたのはその頃である。その後バブル時のピークには年間130万人もの宿泊者数を誇った。

その一方で日本社会において「セクハラ問題」が取りざたされるようになったのも丁度同じ時期であった。1986年、1989年と立て続けに日本において初めてセクハラ問題に関わる裁判が起き[原山2011]、その後1989年には「セクシャル・ハラスメント」が新語・流行語大賞金賞に選ばれ[原山2011:138]、人々が「セクハラ」という概念を知り始めた。1999年には男女雇用機会均等法が改正施行され、「職場における性的な言動に起因する問題に関する雇用管理上の配慮」が求められるようになり[落合・武吉2001:2]、国全体の「性」への意識が急速に変化した時代であった。そのような状況の変化の中で、夏祭りでは前述の通り、祭りを知らない観光客や移住者との揉め事が多発するようになった。共同体の中で長く了解され許されてきたおめんさんの蛮行が、平成という新しい時代の一般的な常識の中では制裁すべき対象へと変化していったのである。

それでもおめんさんは性質を変えながら存続されて現在に至った。それはおめんさんが稲取の人々にとって「厄除けの神」と信じられてきたからに他ならない。陽棒も自然発生的な「悪ふざけ」であったことから、町民に疑問を持たれることなく儀礼として定着した。更にはその「悪ふざけ」も忘れ去られ、山の神信仰説やごもつとも様伝播説といったもつともらしい創作も生まれていった。そして筆者に対し笑いながら「おめんに気をつけろ」と言い、おめんさんを務めた際のことを武勇伝のように話す町民の男性たちの中に「おめんさんへの問題視」は存在しない。彼らにとって、おめんさんの蛮行はあくまで変化する時代の常識に即して“仕方なく”縮小したに

過ぎない「伝統的神事」なのだ。断っておくが、本稿はおめんさんの蛮行の是非を問うものではない。それが当時の男性社会にとって「楽しいムラの祭り」であったこともまた事実だからだ。

一方、そのおめんさんの陽棒のみを抽出し観光客誘致に利用したどんつく祭りの方は、結局この地に根付くことはできなかった。冒頭に記したように既にある土着の性器崇拜を観光利用して大きな祭りとする例は他にも多く確認できるが、稲取のように全く別の祭りとして観光資源にするのは希有な例である。どんつく祭りは一定の期間においては経済効果をもたらしたものの、その目的である集客ができなくなると当然存在意義を失った。これは観光資源として期待される祭りとして典型的な衰退の仕方であるとも言える。高度経済成長期以降の「ふるさと創生」ブームの中行われた各地の「祭りの復興」の中には、経済的効果を狙ったイベントの性格の祭りも少なくない。このような祭りにとって最も重要なのは集客、収益といった明確な数字となる。その目的が達成されなくなることによって祭りが衰退することは仕方のないとも言える。

だがどんつく祭りの場合はご神体が男根であるという点が一般的なイベントの祭りとは異なっていた。芦田徹郎はどんつく祭りと同じイベント的な祭りであり同じく衰退した熊本市の「火の国祭り」について「伝統的な祝祭に比べて内的な発動装置や求心的なシンボルに欠ける」ことがイベントの祭りが衰退する根本的な要因であると指摘しているが〔芦田 2001: 38〕、どんつく祭りの場合はこの「求心的なシンボル」にこそ問題があった。シンボルたる男根が一般には下品なものとして忌避されがちなものであるということも十分町民は理解していただろう。筆者自身、今回の調査の過程で稲取から程近い下田市出身の歴史研究者に「どんつく祭りのような下品な祭りには調査する価値はない」と一蹴された。男根の神輿は求心的なシンボルである一方で、当然こういった軽蔑の対象にもなる。稲取の人々は一部の人間からの軽蔑のまなごしを当然理解していながらも、観光客誘致を第一に掲げて祭りを執り行ってきた。それは過去のどんつく祭りには一部の人間からの蔑視に打ち勝つほどの収益とやりがいがあったからである。しかしその収益は次第に失われ、露骨な性器崇拜という創作物だけが残ることとなった。しばしば町民がどんつく祭りに対して「あれは観光用で本当の祭りではない」という拒否反応を見せるのは、どんつく祭りが既に集客という大義名分を失った「まがい物の性器崇拜」になってしまったからである。利益を優先して信仰なき祭りを行ったことに言い訳をするように、彼らはどんつく祭りが観光用に作られたものであり本来の自分たちとは関係のない祭りであることを強調した。これは観光客にとっても稲取の人達にとっても「求心的なシンボル」であったはずの巨大な男根神輿が、既に稲取の町民にとって正反対の「あとから作られたニセモノ」へと変質してしまったことに起因する。祭りの象徴であるシンボルに対する内外からのそれぞれの視線は完全にねじれてしまったと言っている。男根神輿は観光客にとっての「求心的なシンボル」であるよりも町民にとっての「あとから作られたニセモノ」、そして一部の周囲にとっての「下品で価値のないもの」というネガティブな性質を強めていった。そして結果的にどんつく祭り終了の要因として「外部からのクレーム」を新聞に掲載するに至る。言うまでもなく、これは内側からの抵抗感が外部からのクレームという「ないに等しいもの」に仮託されたものである。いわば「一部の人間からの蔑視」に全ての責任を転嫁したのだ。シンボルとして掲げるべき男根神輿に対する内からの抵抗感が顕著に現れた段階で、どんつく祭りは「終わった」のである。

すなわち、「ご神体／性的儀礼の問題視」はあくまで開催者の内省的な心理に依って発生したものであると言える。そしてどんつく祭りの場合はほかの観光型性器崇拜祭りと異なり夏祭りの「真似」であることを町民が自覚していたことから、内省的な心理が起りやすい状態であった。

更に言えばこの内省的な心理とは「面白さの為に行っている」という一種の“後ろめたさ”によって生じるものである。だからこそ新興の観光型性器崇拜祭りの多くは「信仰」を全面に打ち出し、その後ろめたさを打ち消す試みをしているのだ。そして『雲州消息』を根拠として豊穡儀礼における性的な所作を「物好きの悪戯ではなかった」と理解するように、伝統的な神事とは「面白さ」を求めるものではなく、真面目なものであるという一種の思い込みがある。その思い込みこそが夏祭りの陽棒が存続し得た理由であろう。

しかし実際はどんつく祭りとは「観光客向けの楽しいイベントの追求」「悪ふざけによる男根の造形」という「性器の持つ面白さ」を共に出発点としている点において、非常に似た性質を持っていたのである。「悪ふざけ」と言う聞こえは悪いが、「性は笑いと不可分の関係」[鯨井 1995: 100]であり、例えば春画がその別名を笑い絵といい、性具は笑い道具と呼ばれていたことは性がすなわち笑いと同一であったことを表す[白倉 2017: 33]。前出の『雲州消息』でも翁と娘の性交は真面目な儀礼として行われたわけではない。それを見た観客は「頤を解き、腸を断たずといふことなし」と大爆笑したのである。

あってしかるべきその「性器の持つ面白さ」をどのように処理し祭りへ消化していくかという点において、どんつく祭りと夏祭りは終了と存続という正反対の道を歩むことになった。すなわち、「性的儀礼が問題視されない祭り」と「性的儀礼が問題視される祭り」の差は、「真面目な」伝統的神事である」という自覚の有無によって生まれるものなのである。

おわりに―「娯楽から神事」の正当性―

新興の観光型性器崇拜祭りが興隆し始めた1970年代に同じく萌芽を迎えた「性」のアミューズメント施設である秘宝館は、その展示に「建前」を用意していたという。それこそが道祖神や金精様といった日本古来の性信仰であった。つまり「エロ」を扱う施設である秘宝館も「宗教から入れればお客さんもためらいがない」[田中 1999: 102]という発想のもと、性信仰を展示の一部に取り入れることで施設そのものに「道徳性」をもたらしめたのである[妙木 2014: 105]。

どんつく祭りを始めとした新興の観光型性器崇拜祭りもまた、「伝統」や「歴史」という祭りにふさわしい要素を掲げることによって単なる「おふざけ」ではないことを強調してきた。これは秘宝館の「建前」に限りなく近い発想である。現代社会においては批判の対象にもなりうる性器崇拜も、プリミティブなものというフィルターをかけることによってその価値をむしろ高めることができるのだ。冒頭に記したように、昭和期以降にできた観光型の性器崇拜祭りはそのほとんどが地域の伝説や信仰を発展させて観光客向けに作り上げたものである。これら観光型の性器崇拜祭りの多くが過去の歴史や伝説を積極的に取り入れているのは、それが観光客へ向けた祭りの構築をするという役割と共に、開催する側の矜持の保持という効果も担っているからだ。すなわち、新たに作り上げた性器崇拜の「正当化」である。

しかしどんつく祭りはその基礎となる古来の性器崇拜もなく、町民にとっても利益優先の祭りであった。一応それらしい「歴史」としてでっちあげた「弥生時代から続く性器崇拜の儀礼」という触れ込みも、あまりに事実無根のものであった為に開催者である観光協会側にとっても矜持の根拠とは成り得なかった。更に多くの稲取の人にとってもどんつく祭りは明確な「あとからで

きたまがい物の祭り」であった。盛り上がっているときこそ町民の支持を得たものの、最終的には矜持は失われ、その性器崇拜を正当化することも不可能になったのだと考えられる。そして矜持のなさに伴う士気の衰退が顕著化し、終了へと至った。

一方、素戔鳴神社の夏祭りは伝統的の神事でありながらも、昭和2年以降から平成中期までは女性への性暴力問題を孕んでいる祭りであった。それにも関わらず祭りが存続した理由は、おめんさんの陽棒および性的蛮行が「厄除け」だと意味づけされてきたからである。つまり陽棒が近代になってから始まった「悪ふざけ」であることが忘れ去られた結果、この儀礼は各地に伝わる豊穡儀礼と同様な「古来の性的儀礼」の枠組みに組み込まれていったのだ。特にセクハラ概念発生以前の日本において神事は受け入れるよりほかに、そこには“正当化された”「おおらかな性」があった。確かに「以前の祭りは今よりにぎやかで楽しかった」と振り返る女性もいたが、多くの女性が「恥ずかしい祭りだ」と言い時に語ることをすら拒否するおめんさんの蛮行においては「おおらかな性」など幻想であっただろう。しかし皮肉にも、その「正当化されたおおらかな性という幻想」によって祭りは現代まで行われ続けてきた。これはどんつく祭りがその性器崇拜を正当化できなくなったことで終了したことと対照的な結果であったと言える。

冒頭に記したように、これまで豊穡儀礼を中心とする性的儀礼は古来のおおらかな性の残存であると信じられてきた。もちろん、古来そういった儀礼が我が国に存在し、それが現在でも田舎を中心として残っていることは間違いのない事実であろうと考えられる。

しかし少なくとも伊豆稲取素戔鳴神社の夏祭りにおいては「古来の性的儀礼」など存在せず、「おおらかな性」は当時の社会によって生み出された幻想であった。これは今まで民俗学において妄信されてきた「祭りにおける性的儀礼は日本古来の文化」という言説に一石を投じる事例であると言えるだろう。更に「悪ふざけ」から始まった陽棒が徐々に信仰を獲得していった様子は、これまで「神事から娯楽」[大石 1999: 110] が生まれ「芸能が信仰からはなれるとその多くは娯楽になる」[本田 1958: 10] とされてきた娯楽と神事の関係性を否定する好例ではないだろうか。従来の民俗芸能研究は祭りに「神」「信仰」との繋がりのみを追求し、その根元に「娯楽性」があることを無視してきた[小松 1999]。それを批判的に捉え、「祭礼それ自身が「遊び」つまり「快樂」追求のための装置」[小松 1999: 19]とした小松和彦氏の仮説は示唆的だ。単なる“性的な”「遊び」「快樂」が祭礼を作り出す可能性を否定するべきではない。また実際にこのような「性」と「信仰との繋がり」が研究のみならず祭礼の現場でも求められ「正当化」に用いられている以上、研究者は現行の性的儀礼に付与されている「類感呪術」「子宝信仰」「厄除け」などの信仰が徐々に肉付けされていったものである可能性を頭に入れておく必要があるだろう。

そして素戔鳴神社の夏祭りとどんつく祭りには強調された「性器の持つ面白さ」が通底していた。これは「性が笑いと不可分である」以上、伝統・新興に関わらず多くの性的儀礼・性器崇拜の祭りが内包しているものであると予想される。少なくともどんつく祭り・夏祭りにおいては信仰ではなく面白さ、すなわち小松 [1999] が指摘したところの「遊び」「快樂」こそが性的儀礼の始点であったし、他の多くの祭りもまたその可能性を孕んでいると言い得るのではないだろうか。それを無視して、新興の観光型性器崇拜祭りを「下品で価値がない」と批判する一方で伝統的な性的儀礼を「おおらかな性の残存」と評するような恣意的な差別は、もはや意味をなさないものである。

註

- (1) 新潟県魚沼市の「雪中花水祝」はあくまで神事として執り行われ、集客に関しては重視しない姿勢。
- (2) どんつく祭りに関しては特に九重京司が積極的にレポートを行っている(1981『につぼんの性神』けいせい出版、1973『温泉41』(8)日本温泉協会など)。
- (3) 田中〔1996〕がかなまら祭りを扱う他は確認できない。
- (4) どんつく神社に設置してある看板の文言による。
- (5) 以前はおめんさんは神輿とは別行動し、15～17日まで祭りに奉仕した。
- (6) 「お山入り」は当番制で、田町、東町、西町が毎年交代して担当する。2019年は東町が当番町であった。
- (7) 2019年は元号の変更に伴い、陽棒も新しく作り直された。
- (8) 山神社の陽棒については破棄された、どんど焼きにした、旅館に配った、売却された、など様々な情報がある。また現在でも山神社に大量の陽棒があると思っている町民は多い。
- (9) “稲岡秀男”は“稲岡季男”の誤植である可能性が高い。稲岡季男氏は現神主の稲岡孝宣氏の祖父で先々代の神主である。

文献

- 芦田徹郎 2001『祭りと宗教の現代社会学』世界思想社
- 伊豆経済新聞 2018年6月5日ウェブ版「稲取の奇祭「どんつく祭」、最後のにぎわい 伝統と文化「充電期間」設ける」(<https://izu.keizai.biz/headline/782/> 最終閲覧2019年7月19日)
- 稲岡秀男 1975「伊豆稲取の天王祭り」『旅』49
- 大石泰夫 1999「芸能の二面性(神事性と娯楽性)」小松和彦・野本寛一編『芸術と娯楽の民俗(講座日本の民俗学8)』雄山閣
- 折口信夫 1995「田遊び祭りの概念」『折口信夫全集 古代研究 民俗学編2』中央公論社
- 落合恵子・吉武輝子 2001『セクシャルハラスメントとどう向き合うか』岩波書店
- 金指 徹 2010『稲取風土記:漁師の村の変遷とその発展』
- 鯨井千佐登 1995「性と笑いの民衆文化—「民俗的心性」と権力—」『近世日本の生活文化と地域社会』河出書房新社
- 小出町商工会青年部 1998『青年部20年のあゆみ』
- 九重京司 1973「特集 温泉地のまつり—稲取温泉どんつく祭日—」『温泉』41(8)日本温泉協会
- 九重京司 1981『につぼんの性神』けいせい出版
- 小松和彦 1999「総説 芸術と娯楽の民俗」小松和彦・野本寛一編『芸術と娯楽の民俗(講座日本の民俗学8)』雄山閣
- 静岡新聞 2018年2月2日ウェブ版「どんつく祭6月終幕 東伊豆・稲取「天下の奇祭」半世紀で」(<https://web.archive.org/web/20180203031900/https://www.at-s.com/news/article/culture/shizuoka/453483.html> 最終閲覧2019年7月19日)
- じもテレ <http://tochiokankou.jp/hodare/> (最終閲覧:2019.7.19)
- 白倉敬彦 2017『江戸の春画』講談社
- 田中雅一 1996「現代日本の宗教と性—川崎・かなまら祭考—」『創文』380
- 田中 聡 1999『ニッポン秘境館の謎』晶文社
- 戸井田道三 1972『能—神と乞食の芸術—』せりか書房
- 原山擁平 2011『セクハラの誕生—日本上陸から現在まで—』東京書籍

- 東伊豆町文化協会 2008『ふるさとのならわし—東伊豆町年中行事—』
- 樋口清之 1974「性と信仰」『日本の性神2 上信越編』探美社
- 本田安次 1958「総論」『芸能と娯楽（日本民俗学大系9）』平凡社
- 毎日新聞 地方版/静岡 2018年6月2日ウェブ版「どんつく祭：今年が最後 ご神体PR しづらくあす、東伊豆・稲取温泉」（<https://mainichi.jp/articles/20180602/ddl/k22/040/316000c> 最終閲覧 2019年7月19日）
- 松前 健 1988『稻荷明神—正一位の実像—』筑摩書房
- 宮本常一 1984『忘れられた日本人』岩波書店
- 宮原幸信 1990『いなとり荘の生い立ち』
- 妙木 忍 2014『秘宝館という文化装置』青弓社
- 山折哲雄 1988「優しい翁と怖い翁—人間的な存在と神に近い存在—」『仮面（フォークロアの視点5）』岩崎美術社
- 山口 博 1999『稲取を興した人達』
- 山崎助雄 1994『稲取若い衆団体のあゆみ』
- 山田兼次 1982『伊豆風土記』未来社